

1 中国伝統医学と道教（第十八回）

『水滸伝』から

吉元昭 治

本總會において今回は、いわゆる「四大奇書」について発表ののこりの『水滸伝』についてのべたい。

この作者は元末明初の人で、『三国志演義』や『平妖伝』の編著者として名高い羅漢中であるとしたり、明初に元に降つて明に対する反乱に参加した施耐庵だともいう。

施耐庵とすると『水滸伝』の全体を流れるモチーフに関わりがあるといつてよい。『水滸伝』には、七十回本、百回本、百二十回本等があるが、我々が目にするものは、百二十回本の明代の『李卓吾評忠義水滸伝』を中心にしたものである。百回本には、物語りの最期の田虎・王慶討伐の記載がないことから、百二十回本より古いものと

されている。

『水滸伝』のベースとなったものは、正史『宋史』徽宗本紀等と見られている。宣和三年（一一二二年）二月、淮南の盜賊宋江等が内乱を起す。その党三十六人は、官軍を大いに悩す。そこで朝廷では策を用い、許して方臘を討つことを命じる。すなわち毒を以て毒を制するの式だが齟齬がありうまく行かない。宋江等はさらにその活動範囲を拡げていくが、遂に策にかかり官軍に投降する。

つまり『水滸伝』の首領、宋江は実在の人物であつたわけである。

ついで、宋代の白話小説の一つである『大宋宣和遺事』に『水滸伝』を簡畧的に、宋江等三十六人が梁山泊に拠つて活躍する場面を描いている。『大宋宣和遺事』は、北宋最後の皇帝徽宗皇帝、二十五年の治世のうち、北宋滅亡の宣和七年間の出来事が全篇の三分の一を占めている。文人皇帝として名高い徽宗についての記述の中に、道教を信仰した帝について、詳しくふれているのが注目される。

『水滸伝』は、我が国の江戸期の文学に与えた影響は大

きく、有名な滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』（文化十一年—天保十三年、一八一四—四二年）は、『水滸伝』よりテーマを借りている。その他、建部綾足の『本朝水滸伝』、山東京伝の『忠臣水滸伝』等があり、馬琴にはさらに『傾城水滸伝』もある。

『水滸伝』の初まりは、宋の仁宗（在位一〇二二—一〇六三年）の嘉祐三年（一〇五八年）に天下に悪疫が流行し、朝廷では道教大本山の竜虎山の張天師が招くが、使者と入れ違ひになり、その使者は伏魔殿の扉を開いてしまう。すると黒煙と共に無数の金色の光が四方に散る。それはここに封じこめられていた三十六の天罡星と地煞星である。これらが後に、運命の糸に操られ、各分野から梁山泊に集まる一〇八人の勇者である。

その有様は宋江の小皇帝のようで、呉学究は宰相、公孫勝は国師のように補佐している（十三回）。彼等は忠義堂に会して「替天行道、忠義双全」を盟約する（七十一回）。この儀式は全く道教の様式を具えている。

今回の発表について興味があるのは、
公孫勝。道士で、いろいろな方術を使い敵をたおす。

敵対して降伏した方術者には術を授ける。しかし二仙山の羅真人との約束で離れていく（百十回）。

安道全（医師）。皇甫端（馬医）。共に戦陣にあつて活躍する。のちに前者は太医院医官に、後者は御馬監となる（百二十回）。

神行太保戴宗。脚に甲馬をつけて一日に八百里を走る。泰山廟で道士となつて最期は安らかな死をとげる（百二十回）。

その他、人肉まんじゅう、カニバリズム、『金瓶梅』の下敷となる武松の話などがある。

最期は、宋江は皇帝下賜の毒酒で謀殺され、その他病死、戦死などで一〇八人はわずか二十七名になる（百十九回）。しかし李俊等は脱出し、シャムに新王国を建て『水滸伝』のような悲劇的結末から救われる（『後水滸伝』）。

（順天堂大学医学部産婦人科教室）